

ワルキューレの影で

女子大生秘書の鬼畜な晩餐

園田大造



始めに

例の如くにご挨拶申し上げます。作者の園田大造です。この度は拙作をお買いただき、お礼申し上げますが、この作品には残虐な表現が含まれている、というかもしれませんが。苦手な方は今からでも遅くはありませんので、どうか思い止まってください。

さてヒトラー暗殺事件の後日譚の第二弾です。さて暗殺事件の実行犯はれっきとした貴族で、妻の数の妹が首謀者の一人のベルリン防衛司令官の秘書をやっていたことに目を付けたゲシュタポがこれが素晴らしく美人の女子大生と言う事に目をつけて何らかの役割を果たしたろうと散々に拷問し辱める訳ですが、かつてのクラスメートがゲシュタ☆ニーなっていたり、新ベルリン防衛司令官が結構な鬼畜だったりしたものだから相当悲惨な事になって、挙句食べられてしまいます。

ともあれ楽しんでいただければ、作者としてこれに勝る喜びはありません。

作者敬白

一、ワルキューレについて（前同）	2P	十三、益々過激にしてコウノトリ	181P
二、新たなる獲物	4P	十四、☆タと徹底的に交わらせる	198P
三、やっぱり執拗に裸にする	8P	十五、ナチス人種論についてなど	213P
四、こんな拷問もありか	26P	十六、ゴ☆ラの後には不自然	217P
五、凌辱もいきなり苛烈	44P	十七、いきなり地獄椅子	234P
六、やっぱり鞭うたなければ	61P	十八、さらに地獄の大量浣腸	252P
七、そして本格的な拷問に	80P	十九、地獄に続く地獄	260P
八、白状しないならさらに過激	97P	二十、最後はやっぱり蟻	278P
九、屈服させたら鍛える	113P	二十一、そして最後は茹でてから	296P
十、広場でさらす地獄	131P	二十二、最後は鬼畜による宴会	322P
十一、その後もいよいよ地獄	147P		
十二、凌辱も過激にして檻	164P		

二、新たな獲物

ヒトラー暗殺未遂事件において最もヒトラーの怒りを買ったのは、言うまでもなく七月二〇日、東プロイセンの総統大本営ヴォルフスシャンツェの会議室にプラスチック爆弾を忍ばせた鞆を持ち込んでこれを爆発させた、国内予備軍参謀長であるクラウス・フォン・シュタウフェンベルクであった。まあ実行犯だから当然であつたしヒトラーが嫌悪する、もちろん相当なコンプレックスも含んでいた事は容易に想像でくが、貴族階級に所属していて実際伯爵でもあつたからなおさらに怒りを募らせたものと思われるが、シュタウフェンベルクは他の関係者とともに国内予備軍司令官であるフロム上級大将による即席の軍事裁判、陰謀に参加こそしていなくても見て見ぬふりをして黙認していたのだから、自身の関与を糊塗するための尻尾きりの意図が強く疑われるのだが、により死刑が宣告されてその夜のうちに司令部において処刑されてしまっている。ただしその程度ではその憎悪は緩められる事はなく、当然ヒトラーの意を受けている内務大臣ハインリヒ・ヒムラーは「シュタウフェンベルク伯爵家は一人残らず根絶やしにせねばならない」と発言したほどである。ヒムラーはさらにフォン・シュタウフェンベルク伯爵家に連なる者を徹底的に逮捕するよう命じ、伯爵家の財産はすべて接収され、シュタウフェンベルクを名乗ることを禁じさえしている。ついでだがラチス政権下ではロバに「アドルフ」と名付ける事は禁止されているが、これはまあ関係ない。

またクラウスの妻のニナは夫から陰謀の事は何も聞かされてはいなかったにもかかわらず、四人の子供たちと引き離され、クラウスの母であるカロリーネとともにラーフェンスブリュック強制収容所に収容された。子供たちはバート・ザクサにあつたナチスの養護施設に送られ、再教育を受けた。ニナは当時身重で一九四五年一月に次女コンスタンツェを出産している。またクラウスの長兄ベルトルトはユダヤ人大量虐殺を批判している法律家であつて、反ヒトラーグループに参加していた。彼はベンドラー街の国内予備軍司令部でクラウスとともに逮捕され、フライスラーの人民裁判所で裁かれ、その日のうちにベルリンのプレッツェンゼー刑務所でピアノ線による絞首刑に処された。次兄アレクサンダーは事件があつた時は徴兵されて前線に出ており、ドイツにいなかった。事件にも関係していなかったが、「親類縁者」として強制収容所へ送られている。

フロリンゲン・ヘスはゲシュタポベルリン管区司令部第七部の下士官相当の中でもヒスリーから数えて下から二番目で、何とフランス娘で一体何の間違いでゲシュタポなんかに入つたか、またはいれたか不思議でもあるイボンヌよりも下に扱われている。しかも外見はと言えば安っぽい二枚目と言つた処で、少なしゲシュタポらしい恐怖や威圧感には欠けている代わりに普通に厭らしくて残忍なだけの変態と見て取れては、それは誰だつて重んじようとはしない二十歳すぎの若造にすぎない。で一番下ならばなんかの拍子で目立つ事もあるだろうが、こんなポジションではどうしたって目立ちようもなく、実際前回も辛うじているだけの存在でしかなかったヘスが、何枚かの写真を部長であるマラーや副部長のゲスデアルカ、主任のゲスデンネ、何だか面白そうとしやしやり出てきた日本人の紀伊たちにいかにも自慢そうに指し示していた。そしていかにも面白そうに、

「そうです、これがフィオナ・マインシュタインですが、高等女子教育学院で中等学校の教師になるべく勉学に勤めていたものが、この六月に戦時動員に駆り出されてまして、ただし高等女子教育学院の生徒を工場で働か責めのも勿体ないとベルリン防衛司令部に配属

されまして、司令官のパウル・フォン・ハーゼ中将の秘書のようなものを務めておりました。」

と説明すると、当然マラー達顔はひと際激しくぎらつき始める。ベルリン防衛司令官のハーゼと言えばワルキューレの中の中心人物の一人であり、七月二十日も情勢不明確なままにクーデターのためにベルリンに戒厳令を敷きなどしたが、しかしヒトラー暗殺に失敗しクーデターも失敗に終わると、その日のうちにされて、八月八日に人民法廷による裁判で死刑判決を受け、その日のうちにベルリン・プレッツェン刑務所で絞首刑となっている。

「しかもこいつは実はあの爆弾を仕掛けたクラウス・フォン・シュタウフェンベルクの妻であるニナの一番末の妹であり、クラウスとも実の兄のように慕っていたとなると、こいつも陰謀に何らかのかかわりを持ったと考えるのが普通ではありませんか。しかもクラウスが貴族の出で妻もまた貴族の出でありますから、貴族同士で一体何をたくらんでいたのか知れたものでありません。」

そしてそんな幹部たちの様子にヘスはいよいよ面白そうに満足そうに気持ちよさそうに話していて、そしてその話に連中がはつきりと食いついてきたのを悟ったヘスはなおさら一層面白そうに、

「それにしてもどうです、このフィオナ・マンシュタインと言う娘は何とも言えず魅力的な娘だとは思われませんか。もちろんこの前の美少女も素晴らしかったけれども、いささか色気にかけていた所があった事は否定できなくて、こいつならばその点だったつぷりと楽しめそうですし。」

などと言うとマラーはじろりと上目遣いにこの若造の下士官に何ともおぞましい視線を送って、

「ふむ、ヘスは五六敗と言う事に注目するのか。まあ女と見れば武者ぶりつかずにはおられないお前らしいと言えはお前らしい。ただしこの可憐で色っぽくていかにも純真そうで世の中の厭らしい事なんて何も知りませんと言った顔立ちと、胸や腰回りの豊かで若々しい色香に溢れる様な体つきの対比も堪らないではないか。」

実際写真箱のヘスが隠しどつたものらしいし当時の事だから当然白黒の写真だった、それでもこのフィオナ・マンシュタインという二十歳すぎの娘の魅力を十分すぎるほどに現わしていた。服装は白のワンピースとブルーのブラウスと言った処だがそれでも確かにこれ竹はマラー地ヘスの一致している、二十歳の娘にしても豊かだがあくまで若々しくて厭らしさなんかちとも感じさせない、ただしサディストであるこの連中にはそこがまた堪らない姿態をたつぷりと見せている。さらに言えば確かに二十歳すぎにしてはどこかあどけなさを残しているものの決して白痴的では無くてもむしろその性格の良さを申し分なく表しているが、高等女子教育学院で中等学校の教師になるための勉強に励んでいたことを考えれば当然と言えよう。さらにいえば之は二人とも漏らしていたものの、そのあどけなさを残して美貌と健康的な色香との何とも言えないアンバランスさがまた何とも言えずここにたむろしているゲシュタポのサディストたちの嗜虐心を煽らずにはおかなくて、この四人ばかりではなくて脇からのぞき込んできているゾルバやゲルバ、デボジアたち下士官たちの目までも申し分なくぎらつかせずにはおかぬ。

「しかしシュタウフェンベルクもハーゼももうとつくに処刑されてしまっていては、こいつからこれ以上陰謀の係累を探し出していくのにはいささか無理があるがあるかな。」

まずは副部長のゲスデアルカがその目と顔を尋常ではなくてぎらつかせて話してきて、そうなるとう然他の者たちだって黙ってなどいられるものではないし、こんなに美しくて前の生贄だった初々しい美少女とはまた違った魅力に溢れた娘とくればなおさらと言う物だ。

「いや、こいつ個人の陰謀における役割について白状させるだけでも十分拷問する理由になりえるからな。何しろ暗殺にいかなる形であれ関与したものは横らず摘発し、相応の罰を与えよとの総統自らからの指示があるのだから、連絡係を務めただけでも十分摘発する理由になる。後は『夜と霧』の中でいくらでも料理できるからな。」

「さらにいえばヒムラー内務大臣からはフォン・シュタウフェンベルク伯爵家に連なる者を徹底的に逮捕するよう命じられている。マンシュタイン家とは言えクラウスの義理の妹なのだから、それだけでも十分に逮捕の理由ともなるのではないか。」

「しかもこれ程の美人であるならば、さっさと手を付けなければ他の部局に先を越されて目も当てられない事になりそうだ。へス、何だって今までこんな極上の獲物がいると言う事を黙っていたんだ。」

そんな事を勝手に話し始めてきて、ついにはそんな事まで話してくる者がいて、へスに何だか非難するような視線が集中する。

もちろんへスにしたって別に当の本人がスパイという訳ではなし、そんなものを使っているという訳でもなし、そんな事を言ってくる気持ちがかくはならないにしても、そんな事の責任までおつかぶせられては堪ったものではない。この若者も薄っぺらい二枚目な顔に何とも卑しくて軽薄で、それだけ独特なおぞましい笑みさえ浮かべて、

「そんな事を言うのならばこんな話を持ち込んでくるまでそんな娘の存在なんて意識した事もなかった自分たちの情報収集能力についてどう思っているか、聞きただしい気分だけれどもそんな事を言われたならば、そんな酔狂な事をしている場合とも思えなくなってきたからな。」

などと話しておいてさらに、

「とは言ってもむしろこれだけは聞いておいてもらわなければならないのは、実は私の両親はバイエルン地方のマンシュタイン家の本家の農園で小作をしていてね。当然僕だってその子供だったからこのフィオナの事は同い年で子供の頃からずっと知っていたのだが、もちろん今でもこんな美人なのだから当時から可愛くて、初等学校も中等学校でもずっと一緒に、もちろんこちらは小作の息子で向こうは伯爵様のお嬢様でみこちらからは碌に口を利くこともできなかったが、当時でもとんでもなく可愛くて、もちろん驕った処も他人を見下すような処もちっともなくなくて、こちらからは口が利くこともできなくても、向こうは何のわだかまりもなく言葉をかけてきてくれたものだ。」

などと話してきて、他の者もいよいよ面白そうにこれからの展開に期待にその目をぎらつかせて聞いている。

「で俺だって子供の頃は文と言う物を親父から叩き込まれていたから大人しくしていたけれども、フィオナがあんまり可愛い上に、さっきも言ったようにあんまり普通に口きいてくるものだから、俺だってついその気になってしまつて、中等学校の二年生の時に有りつ丈の思いを込めた手紙をしたためて、となつたら当然フィオナはいい子だから素直に両親に手紙を届けて、知ったばかりの性の知識まで散りばめたものだからそりや大問題になつて、学校は退学になつてしまつて、友人とは絶交させられるわ、両親は家からたたき出

すでしょうがなくてベルリンに出てきて、まあ色々あつてげしゃたぼのお世話になつて今があるつて訳だ。」

などと話していて、急に気色を改めて、

「で先日親父が突然ベルリンにやつてきて、何の用事かと聞いたらそのフィオナの消息などなのともかくも、マンシュタイン家としても娘の嫁ぎ先のシュタウフェンベルク家の今回の事は大変な心痛らしくて、ニサの事は諦めざるを得ないのはともかくもせめて末娘で学生のフィオナは、地元のゲシュタポや警察にもきっちり顔が利く故郷のバイエルンで匿った方が安全。ただし徴用先がベルリン防衛司令部だから交渉もしなければならぬが、なまじ党首が顔を出したら話が大きくなりかねないので、こうして交渉のために自分がやつてきた、などと訊ねるよりも先にベラベラ前部に折れに話してくれて、さっきのような事情を私も知つたという訳だ。ただし話に聞いただけでは確実とは思えなくて、確認して撮つた写真がこいつという訳だ。」

と話しておいてようやく話を終える。

「案件としてはいささか物足りないのだが、ダイナ七部は女性対応が担当だからな。それにこれだけ魅力的なお嬢さんともなれば、これはこいつのやらかしたことに限つて責め苛むのも面白そうだし、そういういきさつもあるのならばヘス、お前にも今度は相当頑張つて貰わねばならぬ。とは言つてもあれだけ滔々と述べたのも自身のアピールにしか聞こえなかつたけれどもな。」

マラーもなおさら一層面白そうに気持ちよさそうに話していて、そこまで言うものだからさすがにヘスもちよつと面目なさそうな顔つきをしているものの、ただし図星だったらしくて頑張らせてくれるのならば、それはそれで構わないと言つた顔つきだ。

「ただし何しろゲシュタポだからな。どこかの酔狂な部局がただいたぶり苛むためだけに拉致してやりたい放題しか寝ないのは我々が一番良く分かつている。さすがにベルリン防衛司令部に乗り込む訳にもいくまいし、恐らくは住んでいるのは高等女子教育学院の寮だろうがここに踏み込むのも物騒だ。明日の司令部への出勤時に這つてるように手配すれば連行は簡単だろう。ゾルバ、ゲルバ、早速取り掛かれ。」

と言つておいてさらにゲスデアルカに向かい、

「少なしスカントには紹介してくれたお返ししなければならぬから声をかけておけ。それから他の連中も大人しく見ていたから声くらいかけてやろう。」

などとうそぶく様に話している。

二十一、そして最後は茹でてから

次の日の朝、苛みつくされている体を昨日同様に二本の柱の間にピアノ線により逆さ大の字に縛られているフィオナ・マンシュタインは、息も絶え絶えになりながらも残っている気力を振り絞るようにして、

「お願い助けて：助けて下さい：グギヒキイイイイッ：ひぐあうっ：ヒイイイイッ：ひぐあお：お願い助けて：お父さん：お母さんお願い助けて：ぐあうっ：殺さないで：グギイエエーエツ：ギヒイイイイッ：死ぬのはいやあーっ。」

と泣き狂って泣きじゃくって哀願を繰り返していた。ただしそこはベルリンのきつとどこかにあるはずの広場ではなくて、ベルリン防衛司令官のゴスラーの山荘の前庭で、もちろん道路は通じているが周囲は深い森林に囲まれていて、猟師だってやってくることもない処だから、ここでもなければさらに過激でどんなに鬼畜な事でも何でもやり放題だ。実際いよいよ最後と言うこともありゲシュタポたちも観覧者たちもここぞとばかりにその口腔を貪りぬいたからに違いない、その顔は当然としてセミロングの黒髪までも白濁した粘液にまみれてさらに地面に滴ってちよつとした水溜りになっていて、その姿をなおさら無残にしている。そしてもう誰がどう考えても処刑と決まっている今日の展開が待ちきれなかったのだろう、太陽がようやく顔を出したばかりだと言うのに、けっこうな城館である別荘の前庭は、当然その別荘に泊まり込んで豪華な食事と飲み物を堪能しているマラーたちゲシュタポたち、その他の観覧者たちが朝食をとるのさえそこそこにバルコニーへと表れるなり、そんなフィオナのいよいよ無残で哀れな有様にその目をぎらつかせているが、しかし彼女の目は虚ろに見開かれ、果たしてそれが分かっているかどうかとも判然としないが、それもまたいよいよ無残で哀れでこの連中の嗜虐心をなおさら煽らずにはおかない。そして何をするかなどとつくにうちあわせてある。

「ふふふ、フィオナは淫乱家畜だけあって、あんなに激しく苛まれていた割には、ずっと元氣そうじゃない。これならばこの最後の一日たつぷりと楽しむ事ができそうじゃない。」

「まあ今まで散々与えていた強壮剤が効いているのだろう。それよりもこうして皆が集まったのだから早速始めなければ。まずは体をきれいにしてやらなければ。」

そして紀伊とヘスはそんな事をいよいよ面白くて堪らないように話していて、そして早速にデボジアが水を激しく噴出しているゴムホースを手にして進み出るなり、それをフィオナの肛門の奥深くに無理矢理ねじ込んでしまう。そしていかにも面白そうに

「ふふふ、昨日の洋梨でここが裂けているからもっと深くねじ込んであげないと、体の中がきれいになるどころかお腹が破裂してしまって狂しようとしていたことが台無しになってしまうし。」

と素管人を話していて、そしてそんなものを体の内部に入れられてしまったのだからフィオナの腹部は注入される水に見る見る膨らんでいき、そして何が何だか分からない間にその腹部が引き裂かれてしまいそうな、そんな凄絶な圧迫感に苛まれなければならない。

「ギャグウギアアアアアッ：あぐあう：ああうっ：何をするの：おながが：おながが裂けてしまう：グギヒイエエーエツ：ギウキアアアアアッ：ヒアギアアアアアッ：一体何を：お願い助けて：痛いーっ：ぐぎうっ：お願い助けてえーっ。」

フィオナはいよいよ無残にその体を戦慄かせて、とさらに一層無残な声を張り上げて泣き狂い絶叫するが、しかしデボジアはそのホースをその体内にねじ込んだままで、一層激しい嗜虐の歓喜と興奮にその目と顔を激しくぎらつかせて、

「ふふふ、これからフィオナが受けねばならないことを思うと、こうして体の内側からだつて綺麗にしておくことがとつても大切なのよ。それにフィオナもせめて死ぬ時くらいはきれいな体でいたいでしょ。」

とそんなことをいよいよ面白そうに話しかけていて、その間もそのホースによって水が凄まじい勢いで注入される腹部は見る見る膨れ上がっていき、フィオナの味あわねばならぬ責め苦もなおさらに凄絶さを増して、やがて以前の九千㍻の大量浣腸並に膨れ上がってしまった、なお注水はやまず膨れ上がっていく。

「グアウギイイイイイッ…ヒグギヤアアアッ…ウアギヤアアアッ…うぐあつ…グギギイイエエエッ…あうおつ…お願い助けて…苦しい…痛い…ウグギイエエエッ…うああ…ご主人様…ご主人様お願い助けてえーっ。」

当然その唇からほとぼしる絶叫と哀願はなおさら凄絶さを増して響き渡っていて、しかしなお体内への注水は容赦なく続く。

やがて本当にその腹部がこのまま爆発してしまうかと思えるほどに膨れ上がってしまった頃、ついに起こるべき事が起こるべくして起こる。つまりは腸内に充満した水がついに幽門を突破して腸から胃、胃から食道へと逆流して、ついにその口から溢れ出し始めたのだ。もちろんこんな事をされる責め苦は地獄に決まっていて、フィオナはその無残に苛まれている体を一層の激しさで悶えのたうって、そしてその水に激しくむせ返りながら、

「ぐえうえげっ…うんぐおう…うおげええ…グゲエオグエエエエッ…ギヤウエエエエッ…ゲムゲウオオオッ…おうげえっ…ムゲエウグウウウッ…ぎげえお…ぐえうえっ…ゲムグウウウッ…。」

と一層無残な声を張り上げて、しかもホースからはなお水を吐き出していて、そのためこの哀れいと言うより魅力的で、そしてそれだけ哀れで無残な女子大生はいつまでもその口から水を吐き出しながらのたうち狂い、眺めているマラーヤゴズラーたちの目はいきなりさらされる余りに無残で凄絶な様にその目と顔を一層の激しさでぎらつかせている。

それにはデズボアはデズボアでなおさら面白そうに、当然水を吐き出しているホースをその腸の奥へとさらにぐいぐいとねじ込みながら、

「どうだい、フィオナ、こんな事をされればそれこそ体の中まで徹底的に綺麗になるからさすがに、すつきりするだろう。これで安心してあの世へと旅立てるからさぞかし嬉しいだろう。」

とそんな事を話しかけてきて、つかさずイボンヌが何ともグロテスクな笑みを浮かべて、

「でも『きれいな体』ってそんな意味じゃない事は私たちだつて分かっているからね。」

などと話してきて、そのさわやかな草原はいきなり面白そうに笑い声に包まれ、もちろんフィオナはと言えばそんな言葉に応じるどころではなくって、ひたすら水を吐き出しながらその体をのたうち狂わせ無残な声を張り上げ続けている。そしてそれは最初茶色く濁っていた水が綺麗に澄むまで続けられる。

そしてそれが終わってしばらくの間、フィオナはその美しい顔を蒼白にしたまま、哀願する事さえもできずにひたすら喘いでいたものの、それでも事前に注射されていた強壮剤

でも利いたのかその頬に赤みが戻ってくる。そして無残で哀れな声を振り絞るようにして、

「お願い助けて：お父さん：お母さんお願い：ヒグヒグイイイイイッ：ヒイイイイッ：ヒグキイイイイッ：ああうっ：私：私死んでしまう：アグギイエエエッ：ひぎう：苦しいの：ウグギイイイイッ：お願いご主人様：ご主人様殺さないで。」

と泣き狂い泣きじやくりながら哀願し始めて、そしてその無残に縛られている体をいよいよ無残に戦慄きながら身悶え始める。そしてタイミングを見計らう様に進み出たのがマラーで、もうどうする事もできないフィオナはすがるような目を向けるが、しかしマラーの顔には残忍でおどましい、悪魔じみてさえる笑みが満面に浮かんでいることに気づくと、その哀願しようとしていた言葉さえも飲み込んでしまう。そしてマラーはそんなフィオナの様子にさらに嗜虐心を煽られたに決まっている、一層残忍で面白そうな、舐めるような視線をそんな生贄の女子大生の肌に這わせながら、

「ふふふ、フィオナ、今はとんでもない重罪人で淫乱家畜だとしても、マンシュタイン伯爵家のお嬢様をこんな姿で祖囲碁を迎えさせるのはあんまりだから。ともかく降ろしてあげよう。」

度々と言うと、早速にゾルバとゲルバ、さらに二人の体格の良い事務員たちが進み出てくるが、その四人が揃いも揃っていかにも力が強そうなのはともかくも、その手には刃渡りが七八センチもある鋸が握られ、その刃はおりからの朝の光に鈍く光っている。

「ふふん、そんな事を言っても、とは言えまだ何も言っていないが、こんなにぐだぐだになってしまった手足なんて、もうどんなにだって使い物なんてなる訳がない。」

「それについてままならばなまじ未練が残るかもしれないから、いっそぶった切つてやろう。」

「ふふふ、フィオナ、きつとすつきりするぜ。それにむしろその責め苦だつて、その責め苦をむしろ少なくするようなものだ。」

そしてこのゾルバやゲルバたちは恐怖に凍りついたようになってる哀れな生贄の女子大生にいいよ面白くて堪らない様に言い放ち、ただしどうしたらいいのかもわからないような顔つきのフィオナの手足に、各々碎けている部分のすぐ内側、肘と膝のやや上辺りに鋸の刃が当てるなり、そのまま何の言葉もなく激しく挽き切られ始め、もちろんそれと同時に余りに凄絶な激痛が貫いて、もちろん黙ってなどいられるものではない。

「ギアヒギアアアアアッ：グヒキイイイイッ：グウギアアアアッ：うああッ：アギキアアアアッ：痛いーッ：やめて：やめて：グアウギイイイイッ：ぐおえッ：マラー様助けてえーッ：痛いわ：痛いーッ。」

フィオナはその目をこぼれんばかりに見開いて一層無残な声をひたすら張り上げて泣き狂い絶叫するが、鋸のぎざぎざになっている刃が肌を、肉を残酷に搔き毟りながら切断していくのだから、その激痛はいよいよ一層残酷だ。

さらにぎりぎりに引き絞られているとはいっても空中にあつて不安定な事もその責め苦をなおさら凄絶にして、その苦悶と絶叫の有様をいよいよ激しく無残にするし、当然こんなに若々しく美しく魅力的な女子大生の手足が鋸で引き切られているのだから、その様はなおさらに一層凄絶で見ている者たちの目もさらに喜ばせるのに決まっている。とは言え一番面白いのは鋸を挽いているこの四人に決まっついて、早速に飛び散る鮮血や細かな肉片に制服やその顔までも汚しながら、

「なるほど、こうしてやるのが一番手っ取り早いのは間違いないな。しかも手足が鋸引きとはこんなに可愛いのにいかにも可哀相だ。しかし可哀相な分一層刺激的なのは例によって例の如しか。」

「とは言え空中に浮いたままで切り易い訳がない。どうにかならないのかな。」

「まあ珠らは珍しい事もやってみたくなったのだろうぜ。それにさっさと切れた処でそれがどうしたの世界だし。」

そんな言葉がいよいよ一層面白そうに交わされる中、四本もの鋸は辺りに細かな肉片を撒き散らしながら、確実にこの哀れな美少女の四肢へと食い込んでいき、もちろん食い込めば食い込むだけその激痛は凄絶さを増す。そしてこの哀れな女子大生はいよいよ無残な声を張り上げて、

「グギャヒキイイイイッ：グウギャアアアッ：ヒアギャアアアッ：うがおっ：痛いーっ：痛いわ：こんな事やめてえーっ：アグギイエエーエッ：ギキイイイイッ：ああう：ご主人様許して：ぐげえう：お願い許してえーっ。」

と泣き狂い絶叫し、そしてその体を激しく戦慄させる。

しかし四本の鋸は容赦なくその四肢に食い込んでいつて、そしておそらくそうなるようにタイミングを合わせたのだろう、ほとんど同時にその骨格を切断し始め、それと同時に骨格を通して信じられないほどの激痛がその全身を貫いてくる。フィオナはその体をそのままのけぞらせるようにしてさらに無残な声を張り上げて、

「ギャオウギャアアアアッ：ひがおっ：ヒアギャアアアアッ：グギギャアアアアッ：ウアキイイイイッ：ぐえあ：お願い助けて：痛いーっ：痛いのよ：ぐえええ：ご主人様助けて：ウアギイエエーエッ：グアキギャアアアアッ：。」

と泣き狂って絶叫していて、そしてもちろんマラーはそんな生贄の女子大生の様子にいいよ気持ちよくて楽しくて堪らない様な顔付きでその様を眺めている。そしてなおさらに面白そうに、

「ふふふ、ひふふ、こうしてその体を切り刻まれるのはさぞかし堪らないだろうな。ただしフィオナにはこれからもっともつと堪らない運命が待っているのだから、そいつを楽しむにしている事だ。」

などと話し掛けるがフィオナはとつくにそんな言葉など聞いているどころではなくなってしまう。

なおさらに凄絶さを増す、手足をこうして残忍に切断されていく脳味噌の中がかき回されるかのような激痛に、ひたすら無残な声を張り上げて、

「ヒャグギイイイイイッ：ギウキギャアアアッ：ヒギギャアアアッ：ああうっ：痛いーっ：お願い助けて：ひぎいっ：助けて：グギイエエーエッ：ぐああうっ：こんな事いやあーっ：マラー様：白銀様：ご主人様助けてえーっ。」

とひたすら無残に泣き狂って泣き叫んでいて、鋸はその手足をいよいよ確実に切断していつて当然の事ながらまずその両腕が切断されてしまう。ただし当然ゾルバとゲルバは構わずその両足に鋸を食い込ませていき、この残忍なギャラリたちの視線がなおさら激しくぎらつく中、その両足もほとんど同時に切断されてしまったて、フィオナの体が芝生の上に鈍い音をたてて転がったのはその五分余りも後だった。

半分になった両腕をタコ糸のようなものでぐるぐる巻きに縛られたうえで、フィオナは中庭の中央に設えられたいる木枠からそのセミロングの黒髪で吊るされていた。そしてい

よいよ恐ろしいに決まっています、この哀れな生贄の女子大生はいよいよ無残にのたうち狂いながら一層無残な声を振り絞るようにして、

「お願い殺さないで：助けて：お願い助けてえーっ：ギャヒキヤアアアッ：キヒイイイーイッ：ああうっ：ご主人様：ご主人様お許し下さい：殺さないで：アヒキイイイイーイッ：あああ：マラー様助けて：死ぬなんていやあーっ。」

と泣き狂って哀願していて、当然見ている者たちは、一層激しくそそられてその目や顔を激しくぎらつかせずにはおかない。そして何しろこんなにも魅力的な生贄なのだから、せっぱなしになどしていられなくなつたに違いない、デボジアとイボンヌがいよいよ面白そうに気持ち良さそうに、

「ひふふ、ひひっ、とんでもない。いくらなんでもこんな中途半端な状態でやめようものならば、マンシュタイン伯爵家のお嬢様にとつても失礼な事になってしまう。」

「大体あそこも肛門もズタズタで手足も筆り取られてしまつていちや、なまじ生きているより味にこだわって美味しく料理して貰つたほうが考えようではよほど幸せなんじゃない。」

「そして丁寧に料理してシチューにして、骨までしゃぶりつくして全く無駄にしないのだから感謝するのよ。」

などと話しかけてきて、そして事務員たちはその体がすっぱり入るくらいな大きな耐熱ガラス製の釜を運んできて、地面のやっぱり巨大な五徳の上に据えられる。

もちろんそれはただ据えられただけで何も入っていないが、何をされようとしているにせよ一層恐ろしいに決まっている。フィオナはいよいよ無残な声をひたすら張り上げて、

「アヒヤウキヤアアアアッ：ヒキヤアアアアッ：あああ：そんな：そんな事つて：いやあーっ：お願い助けて：ひあうっ：死ぬなんていや：アキヒイエエーエッ：ひきひえ：お願い殺さないで：死ぬのはいやあーっ。」

と泣き狂い、絶叫と哀願を繰り返しながらその体を一層の激しさで悶えさせ始める。ただしその有様は見ている者たちをさらに一層喜ばせずにはおかないし、見ている者たちもいよいよ面白そうだっただ鰻えただでは始まらない。

「さあ今度はこのマンシュタイン伯爵家のお嬢様を茹で上げるのだからね。スープで満たして揺らなければ始まらない。」

さらに紀伊に指示されるままに事務員たちはバケツで汲んで運んできたスープを次々にその釜へと注がれていつて、さらにそれと並行して釜の下には薪が積み上げられて、まだスープが注ぎ込まれているその最中だというのに、適当に積み上げられた薪にはさつさと火がつけられて、そのスープを熱し始める。ただし髪で吊るされているフィオナにはそれを直接目にすることはできないが、それでも雰囲気から何が行われているのかくらいは見当がつくし、何より薪に点火された瞬間から、熱氣がいよいよ自分の体を包み込むように責め苛んできて、その恐怖は頭さえ爆発してしまいそうなすさまじさで苛んでくる。フィオナはどうしようもなく無残に泣き狂うよりどうすることもできないが、ただし釜の中のスープが熱せられるまでまだまだまだ時間がかかりそうだ。

「さつき紀伊がいった通り、あそこも尻の穴も引き裂かれて使い物にならなくなってしまっている。それに口での愛撫はいつまでも下手糞だし、手足が筆り取られていては奴隷としてこき使う訳にはいかない。だとしたらおいし食べてあげたほうがむしろ親切というものだ。それにしても日本のこんな美人のお嬢さんの肉って一体どんな味わいなのか、想像しただけでぞくぞくしてくる。」

その間を埋めるようにマラーは一層面白そうに話しかけてきて、さらにちよつと考えて紀伊に、

「ところでまさかこのままシンプルに煮込んでおしまいというのではないだろうな。日本の料理というのはシンプルである事に奥義を窮めるようだが、そんなのでは私もゴスラー閣下も満足はしないぞ。」

などと話してきて、フィオナが味合わねばならないその恐怖は一層凄絶で、な何だか分からないがとんでもなく恐ろしい事が離されている事だけは分かるから、それだけ恐ろしくてフィオナは頭が破裂しそうになっている。

「お願い許してえーっ…紀伊…紀伊さん助けて…キヒキイイイ…ヒイイイ…ッ…あうっ…本当に…本当に何でもするから…いやあーっ…アヒキヤアアアッ…あう…いやだ…お願い殺さないで…死ぬなんていやあーっ。」

フィオナの哀願はさらに無残さを増してほとばしり、手足を半ばから切断されて縛られている体が激しく振れのたうって、その姿を益々一層無残にする。

一方紀伊は子の処刑の担当者と言う事なのだろう、苛まれの手つなのおこの有様を楽しみながら、どうして料理してやるのかその想を練っていたに違いない。すぐにそんな生贄の様子にいいよ一層面白そうに、

「そんなにみんなが寄ってたかって色んな事を言われたのでは、私の言うことなんて何もなくなってしまうそう。でも微妙に芯を外しているのよね。」

などちよつとがっかりしたように話していて、フィオナの美しい顔がいいよ無残に哀れにこわばるのをいいよ気持ち良さそうに眺めながらいいよ面白そうに、

「ふふふ、フィオナ、もちろんこれからお前は総統を暗殺しようとした重罪人である以前に淫乱家畜だからそれに相応しい、とんでもなく恐ろしい目に合わなければならぬのだが、でもその前に聞いておきたいのだけれど、フィオナはステークとシチューのどちらが好きかしら。」

などと聞いてきて、その声さえも何とも不気味でおぞましく恐ろしい。もちろん意味など全く理解できないが、答えなかったらなおさら恐ろしい事が起こりそうだ。

「シチュー…シチューです…あうあう…アヒキヒイイイ…ヒイイイ…ヒイイイ…ヒイイイ…ヒイイイ…ご主人様お許しを…ヒイイイ…あうっ…ああ…私を一体どうする気なの…お願いお助け下さい…ひどいこと許して…ヒアヒイイイ…」

フィオナは戸惑い怯えながらも氣力を振り絞るようにして答える。

とその答えに紀伊の、そしてゲシュタポたちもその顔にはいいよ満足そうで面白そうな表情が浮かぶ。そして紀伊はいいよ面白そうで、中年女の厭らしさを凝縮したような中年女だけにいいよおせましい笑みを浮かべて、

「だったらちようど良かったわ、フィオナ。というのは他でもない、フィオナはこれから、もちろん生きたままで、たつぷりと時間をかけて釜茹でにされて矍鑠り殺された挙句シチューにされてしまうんだ。そしてもちろん僕たちに、そしてわざわざこの山荘に集まっている皆に食べられてしまうんだ。そしてこの紀伊は実を言えば世界で唯一にして、最高の女性の料理人なんだからね。」

と気持ちよさそうに話しかけるが、話している間にいいよ気持ちよくなってきたようでその顔の残忍な笑みもいよいよおぞましさを増してくるようだ。しかしそれは余りと言えばあまりに恐ろしすぎたに決まっていて、フィオナは一体何を言われたのか理解できないといった顔をしている。そして今度はマラーが紀伊にもまして面白そうに話し始める。

「ふふふ、紀伊は大層に言っているが他に女体専門の料理人がするとは思えず、唯一だつたら最高に決まっている。ところでフィオナは最初に見た時からなんて美味しそうな女の子なんだろうって思っていたし、それは我々の共通認識だったからな。それにどうせ殺されるのは最初から分かっていたし、だったら食べないって言うてはないものね。うふふ、とは言えまだ私の言葉が理解できないって様子で、それだっといよいよそそられるわ。」
そしてなおしゃべっているが、いきなりこんな事を言われて即座に理解し受け入れる事ができる若い娘などこの世界にだっている訳がない。ただし恐怖はじわじわと犯しているようで、その顔は無残に強張り引きつっていて、紀伊はいよいよ面白そうだ。

「おやおや、フィオナって可愛いだけではなくって中学の先生になろうと言う程だから頭の良いやなに個と思っていたけれど、淫乱家畜なんかにしたら途端に馬鹿になっちゃったのかな。とは言えまさか生きたまま釜茹でにされて殺された挙句、シチューにされてしまつて皆に食べられちゃうなんて、とても普通では信じられる事ではないでしょうけれどね。」

そしてマラーにくけないようなおさらおざましく言い放ち、そしてその時にはフィオナは余りの恐怖に、おぞましさに、悲哀に、そしてやっぱりどうしようもない口惜しさに言葉を失つてしまっている。しかしそれも長くは続かなくてすぐに髪でづるされているその体は、一層の無残さと激しさにのたうったかと思うと、

「ヒアヒキアアアアアッ：キアアアアアッ：ひああう：アヒキアアアアアッ：悪魔あーっ：どうして：どうしてそんな恐ろしい事を：アヒヒイイイイッ：ひきああうああつ：あなたたちそれで人間なの：ひきああう：悪魔あーっ。」

といよいよ無残な声がほとばしるが、しかし見ている者たちもその様に一層面白そうだし、マラーだっといよいよ面白そうだ。

「ひふふつ、総統暗殺を企てた極悪人ではっばあうりあ人全体に対する裏切り者でありながら、我々を悪魔呼ばわりとは本来ならお仕置きの対象だが、これから地獄の責め苦にのたうたねばならない女の子にわざわざそんな事をする意味もないし、やはりこんなにも無残に惨めに殺される女の子はこうでなければ面白くない。とりあえず紀伊、それではさっそく取り掛かれ。」

椅子に腰を下ろしたままで悠然と指示し、残酷でおぞましい料理という処刑はさっそく開始されなければならない。そしてフィオナの股間から失禁してしまつた尿が溢れるが、もちろんそれも予想していた部員たちは素早くそれをバケツで受け止め、下で熱せられている釜の中には一滴も滴らせない。

そして余程の火力だつたに違いない、釜に満たされているスープは早くも激しく湯気をあげて、この魅力的な極上の生贄を生きながらじつくりと釜茹でにし、生きながらの地獄を味あわせるには十分な温度になっている事を告げている。そしてフィオナはそれが分かっているのかいなのか、いよいよ一層無残な声を張り上げて

「アヒキイイイイイッ：ヒイイイイイッ：ひああう：ヒキイイイイッ：お願い許して：殺さないで：何でも：あううつ：何でもするから：ヒキイエエーエツ：ひぐあ：ご主人様お願い：紀伊さんお願い：キヒキアアアアッ：。」

と泣き狂いながら有りつ丈の思いを込めた哀願を繰り返している。その無残に苛まれつくしている体をやはり必死でのたうたせていて、マラーゆフィオナの上司でこの場所を提供したゴスラー以下の悪魔たちをたつぷりと喜ばせ、楽しませて、そしてこれから起こる

事への期待にその目を一層激しくぎらつかせている。そして紀伊はといえば温度計でスー
プの温度を計っていたが、いよいよ激しくその目をぎらつかせて面白くて堪らないよう
に、

「今七十度、フィオナを地獄にのたうたせるのに十分な温度になってきたわ。フィオナだ
ってそろそろ待ちくたびれているに違いないから、そろそろシチューに取り掛るわよ。
で」

と言うと、フィオナの顔にはすさまじい恐怖が浮かぶが当然容赦はない。その体はゆっく
りと激しく湯気をあげている釜に向かつて降ろされていき、取り囲んでいる悪魔たちの視
線も益々一層激しさを増し、興奮もいよいよ高まってくる。そしてフィオナの膝から下が
失われている、そしてそれでもなお死に物狂いで暴れ足掻きのたうっている足から徐々に
スープの中へと沈められていく。

「アギヒキアアアアアッ：アギウヒイイイイッ：アヒキアアアアアッ：ヒキ
イイイイッ：ひきうう：お願い助けて：熱いーっ：許して：熱いーっ：ひああッ：
アキヒアアアアッ：お母さん助けて：お願い助けて：死ぬのはいやあーっ。」

そしてこのとんでもない熱さはいきなり地獄で、フィオナは益々どうしようもなく無残な声
を連続してほとばしらせて泣き狂い泣き叫び、周りで見ている者たちの興奮は益々激しさを
増している中、その体はなおじわじわとその釜の中へと沈められて行つて、当然のこと
ながらそれとともにその責め苦はいよいよ残酷さを増し、絶叫し哀願する声も益々高くな
る。当然こうしてじわじわ沈められて行つてついには体が沈められ、その責め苦はなおさ
らの地獄に決まっていって、その美しい顔はなお一層無残に引きつり強張っている。しかし
紀伊はいよいよ面白そうだ。

「ふふふ、どやらじわじわと沈められていくのはあまり好きではないみたいだね。まあ私
からしてみればどっちだってかまわないのだけれどもね。」

そんな事を言うのと同時にその体は一気に胸元まで沈められてしまつて、当然こうして茹
で上げられていくその責め苦と恐怖はなお一層の地獄だ。

一気にかまゆでにされるフィオナは一瞬その目をまなじりが裂けそうなほどに見開いて
いたが、すぐに有りつ丈の声さえ振り絞るようにして、

「グアウキアアアアアッ：ヒアキアアアアアッ：アギヒキイイイイッ：ああう
っ：熱いーっ：熱いわ：お願い許してえーっ：うぐあえ：ヒグヒキアアアアアッ：死に
たくない：殺さないで：アグアキアアアアアッ：アキヒイイイイッ：。」

と泣き狂って絶叫していて、さらに一層無残にその中庭に響き続けている。もちろん釜茹
での責め苦もお残酷でこうして罨り殺しになると思うといよいよ恐ろしい。ただし紀伊
はなお一層面白そうくて楽しくて堪らない様子をむき出しにして、

「ふふふ、どうこの熱湯の中でじわじわとに殺されて行つてシチューになるその気分は。
さぞ惨めでしょうね、恐ろしいでしょうね、そして口惜しいでしょうね。でもさっきの部
長の言う通りの字罪人だから仕方がない。もつとも私からしたらそり以前にお前は家畜な
んだから、家畜をただ殺すだけなんて勿体なくて、後で食べてあげるなんて当たり前でし
かないのだけれどもね。」

などと話しかけてきて、もちろんその中庭の雰囲気は当然の事ながらなお一層基地に盛り
上がっていく、特に首魁というべきマーラーと自身の秘書だけになおさらそられてこの
場所まで提供したゴスラーたちは、ただフィオナの無残な様ばかりではなくって、そんな

中庭の雰囲気と、その雰囲気の中で颯り殺されるフィオナ・マンシュタインという美しくすれんで何より魅力的な生贄の姿を心行くまで楽しんでいる。

薪の量はこまめに調整されていて、釜の中のスープの温度はずっと七十度を保たれていた。そしてその中で釜茹でにされている、そして髪の毛で吊られたままでうなだれる事も許されないフィオナは、いよいよ無残な声を振り絞るようにして、

「グギャウキャアアアアアッ：ヒアキャアアアアッ：あがう：熱いーっ：熱いわ：ここから出して：グギキイイイイッ：ヒキイエエーエッ：ああうっ：お願い助けて：死ぬのはいや：グギャヒャアアアアッ：いやだあーっ。」

と余りに無残な絶叫が連続してほとばしらせて泣き狂って絶叫と哀願を繰り返し、その体が釜の中で狂ったような激しさでのたうち狂っていた。もちろんそれなりの材質でできているガラスの釜はその中で少々生贄が暴れたところでびくともせず、しかもそののた打ち回って苦悶する様まではたつぷりと鑑賞する事ができるから、ただ見ている分でも退屈するところではない。しかもこの美しい日本人の娘がこうして生きながら釜茹でになって、最後の最後にはシチューになってしまつて自分たちに食べられてしまわなければならないのだと思えば、その姿が益々刺激的なのは言うまでもない。ただしそれにしてもその様は余りに刺激的に過ぎるものだから、取り囲んで眺めているマラーたちもひたすらその様にその目と顔をぎらつかせて見入っていて、さっきから誰も何も言わない事さえも誰も気が付かないほどだ。一方、いきなりこうして高温のスープに苛まれなければならぬフィオナからしたら、こうして釜の中で生きながら煮られる一瞬一瞬が地獄であり、それも地獄と言うのさえ生易しいと思えるほどの地獄なのだ。

「グギヒギャアアアアアッ：アウキャアアアアッ：ああぐう：ヒギヒャアアアアッ：ああう：お願い助けて：熱いーっ：熱いのよ：ギヒャギャアアアアッ：ギヒャアアアッ：ここから出して：ご主人様：紀伊さん助けてえーっ。」

そして美しく可憐な分一層無残な生贄は当然もうそんな周囲の事など構つてはいられない様子で泣き狂い絶叫し、さらに一層の無残さでその体をのたうち狂わせて、その姿は益々一層刺激的なものだから、取り囲んで見ている者たちばかりか窓から見下ろす有象無象の視線もいよいよどうしようもなくぎらついている。

しかも釜の中のスープの温度はほぼ七十度、最初に紀伊が言つた通りであつさりと煮殺したりはしない代わり、確実にその肌へそして肉へと熱を通していく。そしてそれはこの美しいのはもちろん、罪などは何もない、そしてその事は実はみんな知っていてそれだけ無残で刺激的な生贄に、じわじわとシチューにされて颯り殺しにされる責め苦と恐怖を存分に味わせていく、まさしく絶妙の温度なのだ。実際そのスープの中で生々しい肉の断面を見せていた手足の断面や、無数に刻まれた傷、特に機能の攻めで川のほとんではぎ取られている乳房や背中などはたちまち白っぽく変色してしまつて、もちろんにじみ出たちも止まっていて、これならば出血などで死ぬ事はなさそうだ。そしてフィオナはいきなりその全身を苛んでくるとんでもなく恐ろしい地獄に、一気に死ぬ事も許されないままにその体をのたうち狂わせて、

「グギャウキャアアアアアッ：ヒウキャアアアアッ：ギキャアアアアッ：ぐあうっ：お願い助けて：熱いわ：殺さないで：熱いーっ：グギウキイイイイッ：ひぎあ：殺さないで：ヒギイエエーエッ：ああおっ：死にたくない：熱いーっ。」

といよいよ無残に泣き狂って悶え狂っていて、その姿からはこのいかにも魅力的な生贄の味わっている恐怖や苦痛はもちろんの事、その出来上がった料理の味わいまでも想像させずにはおかず、眺めているものたちの目や顔はさらに一層激しくぎらつかせていて、そして当然のことながらこうしてじわじわに殺されていく美しい日本人の娘の姿はなお一層刺激的で、見ている者たちの興奮は益々一層高まってくる。

「そうそう、言い古された表現だけれど、素敵な生贄がそうやって激しく泣き狂ってのたうち狂ってくれればくれるだけ、料理の出来上がりが良くなるの。だからもつともつと派手に泣き狂ってのたうち狂ってちょうだい。」

「全くだ。こんな有様を見せつけられればそれはうまいに決まっている。」

「大体が美味いと言つてもそれを繰つた事のあるやつだつて滅多にいまい。それにやつぱり駒苦悶と絶叫は捨てがたいし。」

「ギヤキヒキヤアアアアッ……ああうっ……紀伊……紀伊様助けて……お願いいやあーっ……グ
ギキヤアアアアッ……キヒイイイイッ……アウギヤアアアッ……うああっ……死にたく
ない……へス様お願い……どうして私……死にたくない……いやあーっ。」

そしてこうして釜茹でにされているその最中に、当の本人からこうして訴えられているのだから、紀伊たちに見ればいよいよ面白くて刺激的なのに決まっている。

紀伊がそんな事をいよいよ面白くて堪らないように話していて、もちろんそんな事はマラー以下の連中だってわかり切っていて、そしてほかの者たちだって容赦はない。

「といつても實際はあの日本人の女任せで、後は精々おいしく召し上がってやることしかできないし。」

「しかしそれでも十分じゃないか。めったに味わえないぜ、あんな美人の肉なんてよ。」

などと平然と次の趣向が始まるのを待ちかねるかのように話してきて、その前に葉の鬼畜で陰惨な雰囲気はそのまま激しく盛り上がっていく。

一方その間もフィオナは生きながらじわりじわりと煮られていて、当然そんな鬼畜だから能天気な言葉など聴いているどころの話ではない。いよいよ凄まじさを増している焦熱地獄の責め苦に加えて殺されて食べられる恐怖に、

「ギヒヤキヒイイイイッ：グギヒキヤアアアッ：ヒギキヤアアアッ：ああう：熱いーっ：熱いわ：紀伊さん助けて：ひきやひ：アキヒキイイイイッ：紀伊さん助けて：死にたくない：グアキヤアアアッ：お願い助けてえーっ。」

とさらに一層無残な声をひたすら張り上げて泣き狂い、哀願を繰り返しているが、この余りに残忍な処刑を楽しんでいるのは明らかにこの紀伊で、この女はそんなフィオナの余りに無残な有様に、益々一層面白い、嗜虐心をそそられて我慢もできなくなっている様子を隠そうともしない。さらにはよほど興奮しているに違いない、その言葉までもわずかに震わせながら、

「ふふふ、じつくりと生きたまま煮られているのだから、そうやって助けを求めている気持ちは分らないではないけれども、でもそうやって泣き狂って哀願されればされるだけ相手を残酷に苛まずにはおれなくなるのがサディストなのよ。あんなに聡明なフィオナがどうしてこんな簡単なことが分からないのかな。」

などという面白そうに話していて、しかしそんなことを言ってもフィオナにどうしようもない事など紀伊だつて良く分かつていて、周りの者たちは一層面白そうだ。

ただし地獄の責め苦と恐怖にのたうつフィオナが、そんなものなどに一々まともに対応などできるものではない。いよいよ一層無残に泣き狂って、その体も益々無残にのたうち狂わせて、

「ギウアギヤアアアッ：ヒアキヤアアアッ：アヒギイイイイッ：ああぐう：熱いーっ：殺さないで：ぎうあつ：死にたくない：ググキヤアアアッ：お願い許して：ご主人様：あひあが：アウギヤアアアッ：ご主人様お許しを：。」

とひたすら激しく泣き狂って哀願を繰り返し、そしてその体をますます一層無残に激しく泣き狂わせてのたうち回っているばかりで、そしてこんな有様になればただだけ見ている者たちは一層面白そうだ。

「なるほど、こんなものを見ているだけで出来上がりが想像できて、ただでさえ美味しそうな女の子がいよいよ美味しそうになってくる。」

「問題は早くこの料理を食いたいし、しかしこの姿も堪能したいし、ふふ、私はどうしたらいいだろう。」

「それにしてもこいつ、あんなにひどい目に遭っていたって、それでもやっぱり死にたくないのかな。」

「そりゃあもうこれだけ美人で可愛くって性格だつてよかったならば、生きてさえいればいろんな楽しくて面白い事がやってくる。もったも一般人にとってこれが可愛くて魅力的かといえは：、な。」

などといよいよ楽しくてたまらないように話し合われていて、しかしフィオナはひたすら無残に泣き狂ってのたうち狂っているばかりでその有様はいよいよ無残で刺激的で、見ている者たちの嗜虐心とともに食欲までも刺激し始める。

スーブの熱はその間にじわじわと肌に浸透してきて、それとともにその責め苦とともに恐怖もさらに凄まじさを増している。もちろんフィオナはいよいよ無残にあわれに泣き狂って、

「ギウヒキヤアアアアアッ…ああうっ…ああう…死ぬなんていやあーっ…熱い…熱いーっ…アギヒヤギヤアアアアッ…ギヒイイイイイッ…ぐぎあ…アウギヤアアアアッ…お願い助けて…ぐおあ…死にたくない…助けてえーっ。」

と絶叫と哀願を繰り返しながら悶え狂ってのたうち回っていた。もちろん顔がスーブで沈んでしまうのを防ぐのも兼ねているに違いない、髪でつられうなだれる事も許されない顔が無残に引きつって泣き狂い泣き叫んでのたうつさまは一層無残で、それとともに周りの者たちもその興奮はさらに一層高まっていて、そしてやっぱり一際激しくその目をぎらつかせている。そしてゴスラーがふと思いついたように、